茂庭浄水場での３．１１

千枝　真治（仙台市水道局給水部西配水課長）（当時所属：茂庭浄水課）

3.11、私は茂庭浄水場で地震を体験した。その時の茂庭浄水場での顛末について、手元に残っていたメモをもとに記憶をたどってみた。

○茂庭浄水場での“その時”

私は、場内南端に位置する非常用ポンプ棟の建築工事の竣工検査に立ち会っていた。建屋の中には職員と業者が10数名いたと思う。唸るような大きな地鳴りが続いたので、これは大きな地震だろうと思い、同僚には「先に管理棟に戻る」と言って建屋から真っ先に出た。管理棟への最短ルートは場内配水池上を行くルート。配水池の上を走っていると、足元をすくわれるような大きな揺れに襲われ、その場にしゃがみこんでしまった。（そういえば、この配水池はこれから耐震補強するはずだったな・・・このまま崩れるのかな・・・）と思いながら揺れが収まるのを待った。

しばらくして揺れが収まったころ、再度管理棟に向かって走り出した。他課の職員が玄関前にいたので、すぐに職場に戻るように促し、浄水場に入ろうとすると、また大きく揺れだし、その場にうずくまった。模型を揺らしているかのように管理棟がグラグラ揺れて、奥のほうからはガラスの割れる音が聞こえてくる。玄関前に駐車中の車は弾むように揺れており、玄関の両開き扉もウチワのようにバタバタ揺れていた。管理棟の中をのぞいていると、ちょうど中から職員が血相を変えて出てくるところだった。管理棟の中も危険を感じて外に避難するところだったらしい。揺れが収まってから、入口で管理棟内にいた職員と合流し、いったん管理室に集まることにした。

当日は休暇の職員もいたので、場内にいた職員は10名。他に委託業者や工事業者等、職員以外の人もいたため、最終的に全員無事が確認できたのは15時だった。もっと早く安否確認できたのではないかと反省。

管理室では、これからどうするか、状況を整理しながら集まった人たちで話をしていたが、その間に庶務担当のベテラン職員が機転をきかせて買い出しに行ってくれた。15時前には出発したと記憶している。地震直後だったため近くのコンビニにはまだ在庫があり、おにぎり、パンなどのすぐに食べられる食料を、買い物かごひとつ分ほど（数千円分）調達してきてもらった。いいタイミングで調達できたことで、初動期の食糧不足は回避できた。

安否確認後、対応できる人を集めて、場内及び場外の緊急点検を始めることとした。急いで複数人数でのパーティーを組み、それぞれに点検に行ってもらった。私は管理室に残っていたが、ちょうどそのころに津波が沿岸部を襲うテレビの映像が流れてきた。現実として理解が追い付かず、まるでパニック映画を見ているような感覚で、管理室に残ったほかの職員と言葉もなく見入っていた。

○地震直後の茂庭浄水場

点検の結果、浄水処理に影響するような大きな被害はなかったが、沈殿池傾斜板のずれや脱落などが確認できた。また、場内はあちこちで窓ガラスが割れ、建屋のつなぎ目では床がめくれ天井がはがれるなどの被害があった。けが人が出なかったのが不幸中の幸い。

休暇中の職員や非番明番の職員が徐々に集まり、21時過ぎには参集可能な職員は全員集まった。停電で場外設備の遠隔操作ができなくなっているため、当面の対応として、夜勤を6名として体制を組みなおし、自分は一旦帰宅することとした。

夜12時近くになってから、家に向かって出発した。普段は夜中も車通りの絶えない幹線道路も全く車通りがなく、停電で街灯も消えて道路は真っ暗で、バッテリーのある信号機だけが遠くで光っている光景は、ある意味不気味だった。道路は凹凸が激しいところがあるため慎重に運転して帰宅した。そこでやっと家族の顔を見ることができて、とりあえず安堵した。余震が続いているので、家の中よりは車の中のほうが安全だろうということで、妻と子供たち3人を駐車場の車（ワゴン車）の中で寝かせた。寝かせてからすぐに妻の車で浄水場に戻った。（あとで、妻や子供たちから「寒くて寝られなかった」と文句を言われたが）

○水を入れる器は多種多様

地震の翌日。「浄水場は動いているの？」という電話が入ってきた。どうやら、近所の住民らしく、自宅が断水しているため、浄水場も止まっているのか確認したかったようだ。茂庭浄水場は高台にあるものの、周辺の丘陵地も団地開発されており、浄水場を見下ろすように住宅地が形成されている。浄水場よりも高い団地には茂庭浄水場からの給水ではなく、さらに高い位置で受水している広域水道の配水区域であるため、今回の震災では浄水場周辺の高台の団地は断水となっていた。いつ復旧するのかという問いには明確には答えられず、今しばらく我慢してほしいと伝えた。

それからしばらくして、浄水場で水がもらえる、という噂が流れているらしく、周辺の住民が場内

に集まるようになってきた。専任で対応する人を割くほどの余裕はなかったが、事故防止の観点から、手の空いている職員が交代で対応することとして、浄水場の入口入ってすぐにある職員研修所の前に消火栓ホースを伸ばして、来た人には給水を行った。慌てて出てきたのか、鍋ややかん、ボウルなど手あたり次第たくさんの入れ物を持ってきた人や、車のトランクに衣装ケースを入れてきて、これにギリギリまで入れてほしい、という人もいた。衣装ケースは今にも壊れそうなくらいプラスチックがたわみ、車を動かすとジャバジャバとこぼれてしまう状態だが、そのまま運転して帰っていった。車のトランクは水浸しになっただろう。

その後、本部の判断により場内一般者立ち入り禁止ということになり、入口に警備員を配置してもらった。近所の人たちは近場で水が欲しいだろうが、場内の安全確保からするとやむを得ない。

○燃料は満タンにしたかったのに・・・

自家発の燃料でこれほど苦労するとは思わなかった。地震当日は燃料補給ができず、12日も500L1回、1000L2回しかできなかった。3月13日16時半、燃料の灯油はのこり500Lまでになった。自家発の燃費は150～160L/H前後。計算上はあと数時間で電気がなくなる。ちょうどこの時に、近所のガソリンスタンドから給油車ごと借りてきた900Lの灯油が到着し、首の皮一枚でつながった。その後18時には800L、19時には4000Lの灯油が到着した。これで、その日の夜の電源確保のめどが立って、まずは一安心。

19時半には4000Lの給油が完了し、6000Lタンクがほぼ満タンの5500Lまで回復した。21時にはさらに追加で新潟からのタンクローリーが到着したので、運転手には入れられるだけ入れてほしいとお願いしたが、計量は出荷時にしており2000L単位でないと卸せない、とのことで、断られてしまった。100Lでも、200Lでもいいので少しでも満タンに近づけておきたいところだったが、タンクローリーの出発を残念な思いで見送った。

3月15日16時半、電気が復旧し、燃料調達の心配は回避された。しかし依然として茂庭浄水場の取水量をコントロールしている沈砂池（川崎町）や茂庭浄水場で管理している小規模浄水場のエリアは復旧していないため引き続き停電対応となったが、茂庭浄水場で管理している小規模浄水場（野尻浄水場及び滝原浄水場）は16日には復電し、沈砂池は17日に復電した。

○いろいろな給水車

全国からの給水応援が増えてきて、給水車への補給作業も本格化してきた。茂庭浄水場は給水車の補給基地の一つとして位置づけられていたため、場内に給水車用の補給スタンドが整備されていた。しかし、バックで駐車するため効率が悪く、自衛隊の車（幌付きトラックに1tのタンクをけん引しているもの）もバックでの駐車には苦労していた。そこで、建設中だった体験型研修施設の屋外配管に設置してある消火栓3基を利用することとした。竣工直前で管はすでにつながっており、さらにフェンスは施工前だったので場内通路に縦列駐車のように寄せた状態で注水作業が可能だったため、効率良く作業を行うことができた。

注水作業中には、全国から集まってきた人たちと、いろいろなお話をさせていただいた。何とか応援をするぞ、という意気込みが伝わってきて、大変ありがたく、また頼もしく感じたものである。ある事業体では、地元企業に依頼して10t、20tという大きなタンクを引き連れて応援に来ていただいた。その中には酒造会社の10tタンク車もあり、商品名が大きくプリントされているが、中身は水。これで給水しに行くと、お酒だったらよかったね、と声をかけられるよ、とドライバーが言っていた。

全国から応援に来ていただいた給水車は様々で、もともとは道路部の散水車だったという大型車、凍結防止装置を備えている北国の車、ペットボトル対応の給水口を備えている車、愛らしいキャラクターがプリントされている車・・・私が当番の時は、様々な仕様の給水車を興味深く見ていた。

急ごしらえで設置した給水車補給所だったが、能力はどのくらいなのかデータをとってみようということで、入場出場の記録をとってみることにした。最初は時間がかかっていたが、慣れてくるころには到着から出発まで2t車5分、10t車20分、20t車40分で補給できるようになり、ピーク時には一日に200台近い給水車やタンク車が茂庭浄水場で補給していった。補給所は、給水能力もさることながら、車の出入りでもロスがないことが重要であると認識したところである。

震災当日から復電までの間での状況を記してみた。思い起こしてみると、茂庭浄水場では、浄水設備には大きな被害がなかったことが不幸中の幸いであったと思う。浄水処理を継続しつつ、停電対応、給水車補給作業など、状況が変化する中で対応していった記憶がよみがえってきた。様々な災害に備えるというのはもちろん大事ではあるが、様々な事象に対する対応力もまた重要だと改めて思い直したところである。